

「全学を対象とするオーダーメイド英語教育の 継続と発展」成果報告*

Across-the-campus order made English education
at Aichi Shukutoku University:
Report of systematic curriculum improvement in 2009-2010

若山 真幸
WAKAYAMA Masayuki

太田 直子
OHTA Naoko

樗木 勇作
OTEKI Yusaku

中郷 慶
NAKAGO Kay

キーワード：全学英語教育、基礎力養成、TOEIC

1 はじめに

愛知淑徳大学全学英語教育運営委員会（以下、全英教）では、2004年度に現在の全学を対象として展開している全学共通授業科目「言語活用科目（英語）」の元となった科目群を全学で導入して以来、これまで様々な英語教育プログラムを開発してきた。とりわけ、2005年度に文部科学省現代的な教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）に「多文化共生を目指した発信型全学英語教育～モジュール化された体系的カリキュラム開発～」というプログラムが採用された結果、多種多様な授業科目を提供することになった。これと並行して、英語の基礎力養成を目指した授業外プログラムや補習的位置付けの授業も実施してきた。4年間にわたる現代GPによる財政支援後には、2010年度の本学の学部再編を見越して習熟度別クラスの運営方法とカリキュラムの見直しを行い、現在に至っている。

本稿は、愛知淑徳大学特別教育研究助成（2009年度・2010年度）『全学を対象とするオーダーメイド英語教育の継続と発展』の成果として、2009年度以降の全英教による「言語活用科目（英語）」の運営方針、実施状況を報告するものである。2008年度までの全学英語教育の変遷を踏まえてのカリキュラム再編、新規に導入したeラーニング教材の導入の教育効果に触れるだけでなく、今後の検討課題を論じていく。

2 習熟度別授業編成方法の見直しに至るまで

2003年度までの愛知淑徳大学の英語教育は、各学部独自のカリキュラムで実施されており、外国語教育センター（現在の「外国語教育部門」）では、英語学習に熱心な学生を対象として「上級英語セミナー」「ASU TOEIC」などを提供していた。

2.1 2004年度から2008年度の取り組みの概略

2004年度からは、それまでの学部ごとに行なっていた英語教育の共通部分を「全学共通科目」として提供することになり、現在の言語活用科目（英語）の原型となるカリキュラムが始まった。具体的な授業科目としては、TOEIC の基礎力養成を目的とした「英語コミュニケーション1」から「英語コミュニケーション8¹」、TOEIC スコア470点以上の取得者を対象とした「ASU TOEIC I」、「ASU TOEIC II」、TOEIC スコア600点以上の取得者を対象とした上級英語セミナーを開講していた。「ASU TOEIC I」、「ASU TOEIC II」と「上級英語セミナー」は、毎学期繰り返して履修できるような履修制度としていた。長久手キャンパス語学棟（9号棟）と星が丘キャンパス語学教室（3号館）の新設²、ALC NetAcademy³ を活用したCALL 教育の本格的導入、Criterion⁴ を使ったライティング指導、Blackboard によるオンライン教育サポートがこの時期に始まっている。この時期の英語教育の特徴としては、全学向けに同一内容の授業を受講生のレベル別に応じて20名程度のクラス規模で開講していたことと、学習意欲のある学生に対して英語運用能力の強化を目指したより高度な授業を実施していたことである。

2005年度には、『「多文化共生を目指した発信型全学英語教育」～モジュール化された体系的カリキュラム開発～』が文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）⁵ に選定された。4つのモジュール⁶ から構成される多角的なカリキュラムを提供することとなった。それまでに開設されていた「英語コミュニケーション1」から「英語コミュニケーション8」までの英語コミュニケーション科目と「ASU TOEIC」は「基礎力養成モジュール」に、「上級英語セミナー」は「多文化共生理解モジュール」の対話力養成科目という位置付けとなった。2005年度から2008年度までの4年間の全学共通授業科目（「言語活用科目（英語）」）は、表1の通りである。「英語コミュニケーション科目」、「ASU TOEIC」、「上級英語セミナー」をこれまで通り、TOEIC のスコアに基づく習熟度別クラスを編成したが、それら以外の科目（「Get Together and Talk I」と「Get Together and Talk II」を除く）は、習熟度に関係なく履修希望者が全員受け入れていた。

基礎力養成モジュールと発信力養成モジュール科目は、本学の専任教員や非常勤講師が授業を担当したが、地域理解の3科目については、外部講師やゲストスピーカーを招いた講演形式の授業であった。また、対話力養成科目では、授業担当者は本学教員であるが、「Get together and Talk I」には他大学で学ぶ留学生が加わったり、「Get together and Talk II」では、キャンベラ大学学生とのビデオ討論を行うなど、外部との交流もある特徴的な授業形態であった。

基礎力養成 モジュール		英語コミュニケーション 1～8
		ASU TOEIC
多文化共生理解 モジュール	対話力養成	Get together and Talk I
		Get together and Talk II
		上級英語セミナー
	地域理解	Traditional Arts in Japan
		Central Japan
		Multiculturalism in Aichi
発信力養成 モジュール		PowerPoint Presentations
		Presentations on the Web
		Booklet Publishing

表1：2005年度から2008年度までの言語活用科目（英語）の一覧

この時期の英語を主専攻とする（学生が所属する）学科・専攻は、文学部英文学科、コミュニケーション学部言語コミュニケーション学科、文化創造学部多元文化専攻があり、これらの学科・専攻では、「英語コミュニケーション1」～「英語コミュニケーション8」は全て必修科目となっていた。

2.2 習熟度別クラス編制とカリキュラムの見直し

2008年度で現代GPプログラムの財政支援期間が終了するにあたり、全英教では、2009年度以降の全学共通英語科目の再編成を行うことになった。この中で、外国語教育部門の科目として継続するのは、現代GPの実施以前と同様に、「英語コミュニケーション」、「ASU TOEIC」、「上級英語セミナー」のみとなり、「Get Together and Talk I」と「Get Together and Talk II」は国際交流センターが担当する体験教育科目（2010年度以降開講）に移行することになった。「Traditional Arts in Japan」と「Central Japan」は、2010年度から2年間は文学部英文学科の専門科目として、それぞれ1/4期ずつ開講され、2012年度からは国際交流センターによって、星が丘キャンパス、長久手の両キャンパスで開講されている。残りの科目は廃止¹⁾となった。

一方、「英語コミュニケーション」、「ASU TOEIC」、「上級英語セミナー」の内容や運営については、次の2点を見直すことになった。第一に、科目内容と名称の変更である。特に英語コミュニケーション科目は8科目が開講されていたが、それぞれの内容やレベルの違いが分かりにくいようで、学生からはどのように段階的に履修すべきか明確でないとの意見が寄せられていた。第二に、習熟度別クラス編成の方法である。それまでは、英語コミュニケーション8科目に対して、それぞれの履修希望者を TOEIC IP テストのスコアに基づいてクラス分けを

行なってきた。これは、学生の立場からすると、どの科目も履修できる機会があり、履修の選択が広がるという点で望ましい反面、運営する側の立場からすると、PC教室の同時利用数の制限も加わり、クラス編成（開講数と開講時期・時間の設定）が非常に複雑で大変な作業となっていた。特に、次のような問題が多々生じた。例えば、「英語コミュニケーション4」に履修希望者が60人あったとする。習熟度別クラス編成を考慮しなければ、各授業定員が20名なので、20名ずつ3クラスで授業が行える。ところが、レベルAの学生が50名、レベルBの学生が10名の場合、レベルBのクラスは10人で構成されるが、レベルAのクラスを定員が20名で構成すると、10名が受講できなくなってしまう。特に、2限や3限の選択科目ではこのような理由で多くの学生が履修希望をしても、1次登録の段階で履修漏れする機会があった。実際には、習熟度別分布はこれ以上に幅広く、複雑であり、限られた教室数をやりくりしながらのクラス編成作業はとても大変な作業であった。さらに、同じ科目名にもかかわらず、様々なレベルのクラスを担当することになる非常勤講師もおり、使用するテキストや授業内外で活用する ALC NetAcademy のコースを使い分けなければならないといった問題も生じていた。

カリキュラムを見直さざるをえないより深刻な問題は、初級レベルの学生が増加していたことである。表2は、毎年4月に実施している新入生全員を対象とした TOEIC IP テストの過去5年間の平均点の推移を示したものである。2008年度と2012年度とを比較すると、約20点近く下がっている。さらに、入学者の半数以上が TOEIC スコアが300点未満であるという現状に対応する必要があった。

2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度
317.2点	318.3点	316.7点	309.5点	299.3点

表2：過去5年間の入学時 TOEIC IP テストの平均点

TOEIC を運営している財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会が発表している『TOEIC スコアとコミュニケーション能力レベルとの相関表』⁸によると、平均点が300点というのは、「通常会話で最低限のコミュニケーションができる」というレベルにすぎない。

レベル	TOEICスコア	評価（ガイドライン）
A	860 以上	Non-Nativeとして十分なコミュニケーションができる
B	730 以上	どんな状況でも適切なコミュニケーションができる素地を備えている。
C	470 以上	日常生活のニーズを充足し、限定された範囲内では業務上のコミュニケーションができる。
D	220 以上	通常会話で最低限のコミュニケーションができる。
E		コミュニケーションができるまでに至っていない。

表3：TOEIC スコアとコミュニケーション能力レベルとの相関表

こうした事情を踏まえて、全英教では、2005年度から2007年度に英語学習をもう一度基礎からやり直したという学生を対象に「基礎からのやり直し英語」⁹ というプログラムを実施した。さらに、2008年度と2009年度には TOEIC 300点以下の学生を対象とした「英語コミュニケーション基礎」¹⁰ という科目を開講した。特に後者では、リメディアル教育の一種という位置付けから、基礎的な文法項目を再学習して TOEIC スコア350点を目指すよう指導を行っていた。しかしながら、こうした取り組みだけでは不十分であり、本学学生の英語力低下に対応するには抜本的な見直しをする必要に迫られていた。

2.3 カリキュラム再編

そのような事情を踏まえて、全学英语教育のカリキュラムを TOEIC のスコアに応じた内容に変更した。2009年度は移行期として、この新しいカリキュラムは2010年度から完全実施されている¹¹。

Basic English 1	TOEICスコア295点以下の取得者を対象とする。
Basic English 2	
English 1 (Listening)	TOEICスコア300～395点の取得者を対象とする。 または、Basic English 1, 2 のどちらかの単位を修得している学生も履修対象とする。
English 2 (Reading)	
English 3 (TOEIC 1)	
English 4 (Speaking 1)	
English 5 (TOEIC 2)	TOEICスコア400点以上の取得者を対象とする。 または、English 1, 2 のどちらかの単位を修得している学生も履修対象とする。
English 6 (Speaking 2)	

表 4: 変更後の英語コミュニケーション科目群

従来は、「英語コミュニケーション1」から「英語コミュニケーション8」を科目名としていたが、新カリキュラムでは、Basic English という科目を科目名に入れることになった。「Basic English 1」と「Basic English 2」は、TOEIC スコア295点以下の取得者を対象とした基礎力養成を特に意識した科目である。「Basic English 1」は、CALL システムや TOEIC の問題・解説集などを用いた学習を通して、基礎的な文法力やリスニング力と英語表現を聴く能力を身につけることによって、TOEIC のスコアを伸ばすだけでなく、大学の授業で使われる英語で書かれた基本文献を読めるようになることを目標としている。「Basic English 2」は、ALC NetAcademy 2 の Reading 機能を活用して、英文の内容を素早く、正確に読みとれる能力を身につけるために、さまざまなタイプの英文を多読・速読する練習を行なっている。

「English 1」から「English 4」については、初級から中級レベルの学習内容とした。履

修条件としては、TOEIC スコアが300点台か「Basic English 1」か「Basic English 2」を履修済みの学生を対象としている。「English 1 (Listening)」と「English 2 (Reading)」は、それぞれ、パラグラフ単位のリスニングとリーディングを訓練する。「English 3 (TOEIC 1)」は、TOEIC に向けての基本的な文法や語彙など基本事項を徹底的に身につけることを目標とし、ALC NetAcademy 2 の演習問題を利用したディクテーション、シャドーウィング、ペア・プラクティスや Speed Listening と Speed Reading 機能を活用しながら、速聴・速読練習文法や語彙などの基本事項の整理を行っている。「English 4 (Speaking 1)」は、英語のネイティブ・スピーカーの教員が授業を担当し、TOEIC の会話問題で使用されるトピックを使って、実用英会話の基礎的な力を身に付けることを目標としている。

「English 5」と「English 6」は中級レベルの学生を対象とした科目である。「English 5 (TOEIC 2)」では、TOEIC に向けての発展的な能力を身につけ、英語の総合力を高めることを目標とする。「English 6 (Speaking 2)」では、英語のネイティブ・スピーカーの教員が授業を担当し、TOEIC の会話問題で使用されるトピックを使って、実用英会話の応用的な力を身に付けることを目標としている。

再編後のカリキュラムにおいても、引き続き、学習意欲の高い学生、上級レベルの学生に向けた授業も開講している。

Advanced General English I	TOEICスコア500点以上の取得者を対象とする。または、English 4, 6 のどちらかの単位を修得している学生も履修対象とする。
Advanced General English II	
Advanced Academic English I	TOEICスコア600点以上の取得者を対象とする。または、English 4, 6 のどちらかの単位を修得している学生も履修対象とする。
Advanced Academic English II	

表5：上級者向けの科目

「Advanced General English I」(日本人教員担当)、「Advanced General English II」(外国人教員担当)は、TOEIC 対策講座という位置づけで、TOEIC の得点アップを最大の目標としている。語彙や文法力増強だけに留まらず、ペアワークやグループワークを通じての基礎的な会話能力の反復練習も行なっている。最上位のレベルに位置する「Advanced Academic English I」(日本人教員担当)、「Advanced Academic English II」(外国人教員担当)では、日本人教員の授業においても全て英語で行われ、通訳演習、時事問題考察、文化考察などの様々な授業活動を通して語彙力増強と英語運用能力の強化を目指している。さらに、外国人教員の授業では、英語によるプレゼンテーション、時事問題考察、文化考察などの様々な授業活動を通して語彙力増強と英語運用能力の強化を目指している。

これまで、両科目とも履修条件が TOEIC スコアのみで決められていたため、履修者は限定されていたが、今回の再編により、「English 4」か「English 6」を履修済みの学習者にも履修する機会が与えられるようになってので、より多くの学生が受講できるようになった。加えて、「Advanced Academic English I」と「Advanced Academic English II」は、週2コマを同時履修しなければならないが、他の科目との重複で履修者が少なかったが、2011年度からは、1コマずつの受講が可能となったため、履修希望者が増加している。

2.4 まとめ

2009年度からのカリキュラム再編によって、次の3点が改善された。1つめは、「Basic English 1」と「Basic English 2」という本学の現状にあった「基礎力養成」科目を設置したことである。2つめは、学生が各自のレベルに応じてどの科目を履修したらいいのかをより明確に示せたことである。3つめは、単位を取得すれば次のレベルの科目を履修できるようになり、英語学習者に目標を持たせて授業を受講させることが出来るようになったことである。

3 ALC NetAcademy 2 の導入

これまで活用してきた ALC NetAcademy に加えて、2010年度からは ALC NetAcademy 2 のうち、3つのコース（スーパースタンドコース、英語入門コース、TOEIC® テスト演習2000コース）を導入した。これは、授業科目再編に伴い、より基礎学力を伸ばすための教材が必要になったためである。

「スーパースタンドコース」は、初級から上級レベルのリスニングとリーディング問題を収録しており、英語のネイティブ・スピーカー教員によるスピーキングを中心とした授業の「English 4」と「English 6」以外で活用している。「英語入門コース」は、英語に苦手意識を持っている学習者向けの教材で、カタカナ語と英語の音の比較に始まり、文法の基礎項目を振り返りながら、英語の基礎力を再確認する内容になっている。これらのeラーニング教材は、教材の一部として授業の中に取り入れることになっており、各授業の指定範囲のユニットを、授業内あるいは授業外で学習するように受講生に指示を出している。さて、「基礎力養成」の部分に着目すると、ALC NetAcademy 2 の導入によって、3つの入門コースが利用可能となった。授業で主に活用しているのが「英文法コース」で、「英語入門コース」と「Power Words コース」は補助教材的な扱いとなっている。

3つめの「TOEIC® テスト演習2000」は、全ての科目で1回目と15回目の授業で「テスト100」¹²を実施することになっており、教員が受講生の習熟度を測るため、あるいは受講生自身が各自の到達度を把握するために用いられている。このように、2010年度からは、カリキュラム編成でも授業の教材利用においても、学習者に授業開始時には学習目標を持たせ、15週の授業終了後には到達度を確認させるということを徹底している。

3.1 「TOEIC® テスト演習2000」の実施効果

さて、こうしたeラーニング教材の導入効果はどの程度あったのだろうか。導入前の2008年度入学生と導入を開始した2010年度入学生の入学後2年間のスコア推移をそれぞれ調査した¹³。

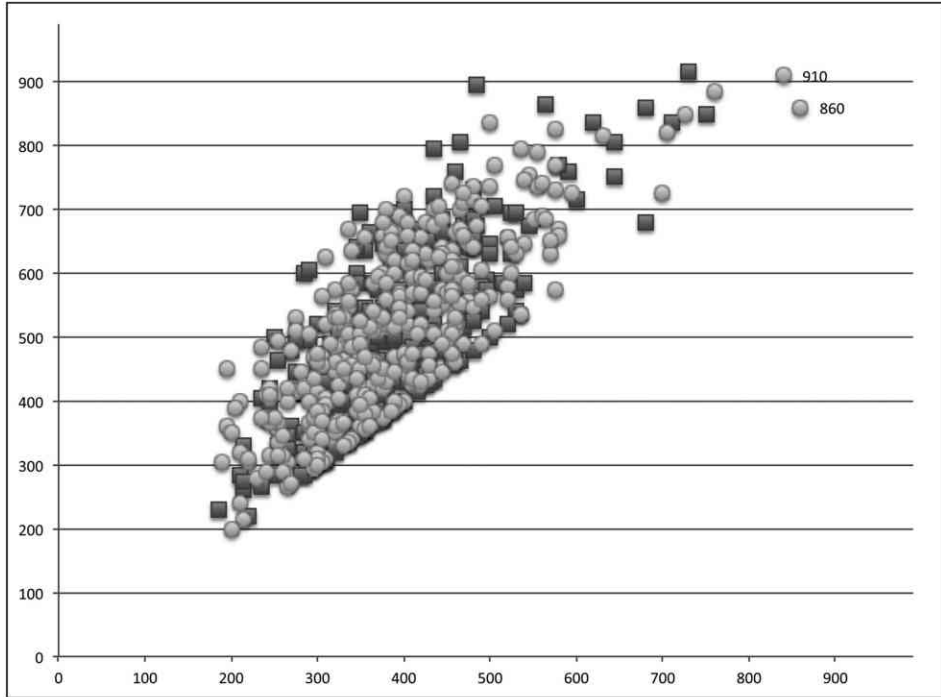


図1：スコア推移の分布

□が2008年度入学生、○が2010年度入学生の2年間のスコア推移を示している。

	2008年度入学生	2010年度入学生
TOEIC IPテストの伸びの平均点	110.72 (n=299)	126.07 (n=338)
t-検定 (両側検定)	0.0202 ($p < 0.05$)	

表4：TOEIC IPテストの伸び具合

表4において、「TOEIC® テスト演習2000」導入前の2008年度入学生の2年間の伸びの平均が110.72であったのに対して、導入後の2010年度入学生の2年間の伸びの平均は126.07となっている。t-検定の数値が示すように、この数値は統計上で有意であるため、「TOEIC® テスト演習2000」導入の効果はあったと言える。

図2は、TOEIC IP テストと「TOEIC® テスト演習 2000」の相関に関する考察するためのものである。

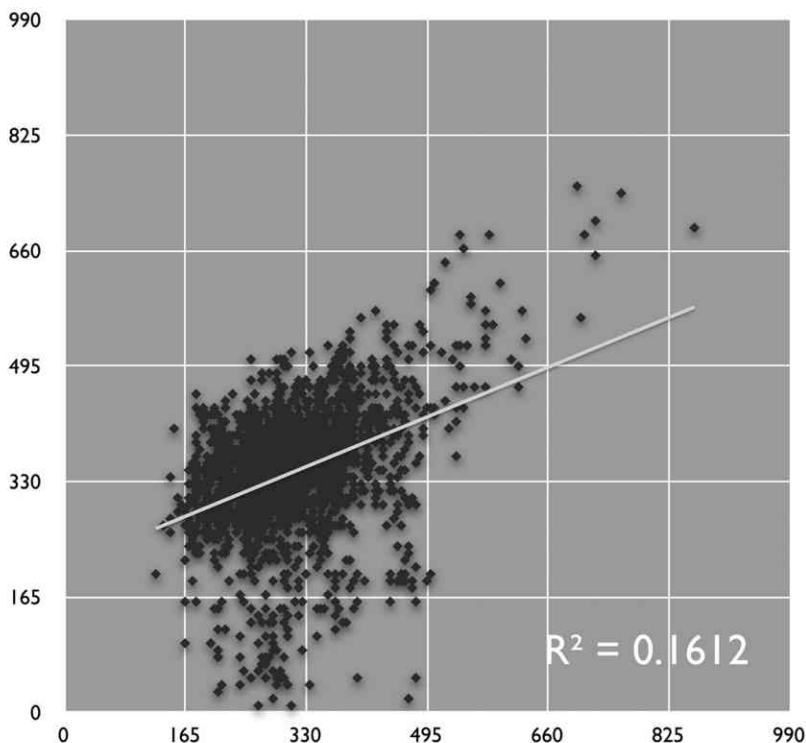


図2： TOEIC IP テストと「TOEIC® テスト演習2000」の相関

図2の横軸は2011年度4月入学時の TOEIC IPテストのスコアを表し、縦軸は2011年度4月の授業中に行った「TOEIC® テスト演習2000」で表示された TOEIC スコアを表している。このグラフからわかることは、「TOEIC® テスト演習2000」は350点付近より下のスコアに関して実際の TOEIC スコアよりも厳しい評価を出し、350点付近よりも上位の場合には、実際のスコアよりも低めのスコアを出す傾向があるということである。

理想としては、実線に沿った分布をなすことが望ましいのであるが、この分布の広がり、とりわけ、「TOEIC® テスト演習2000」の200点以下と算出されているデータのほとんどは、機器トラブルにより制限時間をフルに利用できず中途半端に終了させられたケースが多い。それでもなお、TOEIC IP テストとの相関係数は0.40であり、機器トラブルを多く含むと思われる200点以下を捨棄すると、相関係数は0.53である。よって、「TOEIC® テスト演習2000」の第1回目のプレテスト、第15回目のポストテストとしての有用性に問題は無いと判断できる。

3.2 電子カルテの活用

全英教では、全学部生の TOEIC スコアのデータを「電子カルテ」で管理しており、前節で紹介した TOEIC スコアの変化（入学時からの伸び）、リスニングとリーディング別のスコア、受験時期と受験回数などが、瞬時に参照できる。これらのデータは、全英教の担当教員による「英語学習相談」、履修登録時の「英語履修相談」で利用されるだけでなく、本学のアカデミックポータル内の各学部・学科の電子カルテにもデータを提供しており、それぞれの学生のアドバイザーによる学習指導にも活用されている。

4 まとめと今後の課題

本稿では、愛知淑徳大学特別教育研究助成（2009年度・2010年度）『全学を対象とするオーダーメイド英語教育の継続と発展』の成果として、2009年度以降の全英教による「言語活用科目（英語）」の実施状況を振り返ってきた。特に、全学的な TOEIC スコアの低下に対応するため、「基礎力養成」を意識したカリキュラムの編成（Basic English 1 と 2）と ALC NetAcademy 2（eラーニング教材）の導入についての背景を概観した。まだ、新しいカリキュラムを開始してから2年しか経過しておらず、詳細な分析をするほどのデータが集まっていないため、本論文での分析は必ずしも十分ではないが、今後、別の形で成果の報告をしていくつもりである。

すでに見たように、「Basic English 1」と「Basic English 2」は、TOEIC スコアが295点以下の学生を対象にしていることを紹介したが、このグループ内でも学習理解度の差が明らかになってきた。そのため、2013年度からは、TOEIC スコア240点以下を対象とする「Introduction to English」というリメディアル教育としての性格を持つ科目を新設することとなった。数年後にはこの成果報告についても行う予定である。

*本プロジェクトは、2009年度・2010年度愛知淑徳大学研究助成（特別教育研究）『「全学を対象とするオーダーメイド英語教育の継続と発展」』の支援を得て実施された。

注

- 1 これらの科目も TOEIC スコアに基づいた習熟度別クラス編成となっている。
- 2 2010年度からは、星が丘キャンパスでは新設された5号館で語学教育を行なっている。
- 3 ALC NetAcademy とは、株式会社アルク教育社が提供する e ラーニング教材で、ネットワークを通じて英語学習者はマルチメディア機能を活かした英語教材を使って学習できる。さらに、学内からだけでなく、学外からもアクセス可能なため、授業外教育にも効果を発揮する。
- 4 米国教育テストサービス (Educational Testing Service; ETS) が開発した英語ライティング自動採点プログラムのことを指す。学習者がインターネットを使って提出した英作文が10秒程度で採点されてフィードバックされる。学習レベルも、米国の小学生向けのトピックから GRE や TOEFL テスト向けなど幅広く用意されている。
- 5 選定結果は、文部科学省・高等教育局大学振興課大学改革推進室のページで確認できる。
(http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/286184/www.mext.go.jp/b_menu/houdou/17/08/05080601.htm)
- 6 4つのモジュールとは、基礎力養成モジュール、多文化共生理解モジュール、発信力養成モジュールと学部等固有モジュールである。以下のページ(<http://www2.aasa.ac.jp/gp/english/index.html>)で活動実績が確認できる。
- 7 多くの学部・学科で、英語を使ったプレゼンテーションをする授業はあるので、それらの授業の中に組み込んでいってもらうという意味合いで廃止した。
- 8 公式データ・資料のページ (<http://www.toeic.or.jp/toeic/data/>) に各種分析・参考データが掲載されている。
- 9 授業外の英語学習サポート体制で、2ヶ月を1タームとし、教科書の添削指導が主となるプリントコースと、CHHeru.net という e ラーニング教材を使ったインターネットコースから成る。詳細については、太田他（2009）を参照のこと。
- 10 TOEIC スコア295点以下を対象とし、取得単位を卒業要件単位には含めない科目であった。
- 11 文学部英文学科のみが全科目を必修科目としているので、TOEIC スコアに関係なく入学後2年間に8科目を履修する。ただし、学科内で習熟度別クラスの編成を行なっている。
- 12 TOEIC® テスト演習2000コースのサブコースの名称で、リスニング問題50問とリーディング問題50問の合計100問から構成されている。
- 13 調査と分析は、全学英語教育運営委員でもある樗木（文学部英文学科）によるものである。

参考文献

太田直子 他（2009）「全学を対象とするオーダーメイド英語教育－『基礎からのやり直し英語』－」『愛知淑徳大学論集－文学部・文学研究科篇－』第34号 13-30

太田直子 他（2010）「全学を対象とするオーダーメイド英語教育 II －『基礎からのやり直し英語』－」『愛知淑徳大学論集－文学部・文学研究科篇－』第35号 13-29